ロックマンEXE　～Network CINDERELLA～

オフィシャルネットバトラーウッキー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦２０ＸＸ年、電脳獣事件終結から数ヶ月、無事合同卒業式を迎え、才葉シティの中学校に入学したネットのもとに、綾小路やいとから招待状が届く。

それは昨今その名を世界中に轟かせている大手アイドルプロデュース企業、３４６プロダクションのあるミシロシティでのイベントの招待状であった……。

光熱斗とロックマンはアイドルとの邂逅に胸を踊らせながら才葉シティの友人と共にその招待を受ける事に。

―平和になった世界に再び巨悪が現われるとは知らずに…

※ロックマンエグゼ×アイドルマスターシンデレラガールズのクロスオーバーです

ぶっちゃけアイマス側の設定はほぼほぼ無視しており、めちゃくちゃなオリジナル設定満載や稚拙な文章、露骨なロックマン勢や一部のアイドル優遇、また登場人物の扱いに関して不快に思わせる面が必ず思わせる面が多々あると思いますのでそういった要素が苦手な方はブラウザバック推奨です。

以上を踏まえて大丈夫だ、問題ないともいう方は温かく見守っていただけたら幸いです

目　次

プロローグ ―――――――――― 1
ネットワークシンデレラフェスティバル！ ―――――――――― 8

プロローグ

おっす！俺、光熱斗！秋原町に住むごくごく普通の小学６年生だ！
俺は今中学１年生！秋原町と才葉シティの合同卒業式が終わってから色々あって、今はまだパパがバンパクの手伝いやプログラムの補修なんかで必要だからって、俺は才葉シティのセントラルタウンの中学校にコジロー達と一緒に通ってる！
色々あったけど今じゃすっかりこの街に馴染んじゃった。因みに将来の夢はネットバトラーか、秋原町に戻ったら、科学省でパパみたいに科学者になって、あんな事件がもう起きない様な、ネットワークを平和にするすっげープログラムを作る事！
先生達はゼンシャの方が俺にとっては現実的だ、なんて言うけど……まぁそうだよなぁ。
『っ…と…ん…！っとく…！』
ぁ、そうだ！デカオ達ともメールで連絡は取り合ってるし、才葉シティとデンサンシティのネットワークにかなりの近道が出来たからそこを通じてナビでのやり取りも出来てる！ちょっと寂しいけど、コジロー達もいるし、慣れたもん！何とかなるさ！
『熱斗くん!!』
「うぉわっ!?」

……肘を着いていた机の端の方からの声に椅子から転げ落ちる。慌てて机に手を掛けて立ち上がれば、数年前から世界中に普及した携帯端末「ＰＥＴ」の中から声がしていた。熱斗はそれを手に取り、画面に映る少年に返事をする。
「何だよロックマン！脅かすなよ！」
『だって熱斗くん、さっきから独り言ばっかりなんだもの！しかもまるで自己紹介みたいだったし！』
「え”。こ、声出てた？」
『うん』
「ロックマン」、顔以外の殆どの部分を青いアーマーに包まれた画面の

中の少年の名だ。この携帯端末ＰＥＴの中に入っている人格付きのプログラムの事を「ネットナビ」と呼ぶ。今やナビは生活のお供となっており、様々な仕事をこなす。

…と言うのも、インターネットが普及も普及、「電脳」と呼ばれる世界が普通のコンピューターからＰＥＴの様な小型端末、ＴＶ局のアンテナや街の重要施設、はたまたＴＶやトイレ、古びたスピーカーや銅像といった場所にも広がっているこの西暦２０ＸＸ年の世界だからこそだ。

ありとあらゆる場所に広がるネット世界はもう１つの地球と言っていい程に日々世界を広げている。それもこれも科学者達の努力の賜物である。こうしたネット世界がいつから普及したのか覚えている者も少ないだろうが、今やネット世界はナビを通じての人間の仕事場であったり、子供達の遊び場であったりもする

一時期このネット世界による教育への悪影響や体の未発達等も問題に取り上げられたがそうなる人間はごく少数。熱斗達の様な健全な少年達にとってネット世界はあくまで遊び場の１つであり、サッカーやバスケットといった遊びもしっかりと流行っている。

…無論、これだけ普及したネット世界で問題が起きない筈は無い。街の水道や電気の通り、データによる物資の運搬等もネットで行われている為、そういった仕事や日常への障害もしばしばある。

が、１番の問題はネット犯罪である。過去にネット世界の封鎖を提案させたレベルのネット犯罪……数件、数十件と行われた全てが解決されてはいるものの、一部の人間には恐怖として未だ巣食っていた。

光熱斗とロックマンも、そういった事件を解決して来た人物。知る人ぞ知る世界のヒーローといった所か。熱斗の小学校への来賓として来たがっている人物は皆、熱斗と事件で関わってきた人物である。

熱斗が引っ越して来てから１年、というか１月も経たない内にこの才葉シティでも熱斗の人生で５本の指に入る大きな壁にぶち当たった。

―電脳獣事件、ネットワーク全体の支配や消滅さえも有り得たこの

事件はついこの間の出来事。熱斗は時折ある物を見ては懐かしく、そして哀しくも感じる事件だ。
才葉シティの後にも先にも最大となるこの事件は小学校や中学校でも語り継がれる事となった。現在、とある2つのプログラムが科学者達の間で開発中であるらしいが熱斗は詳しい事は知らない。
ただ、その2つのプログラムはいつか必ずネット世界に一時でも、完全なる平和を取り戻すだろうと熱斗は父から聞かされていた。
そのプログラムの完成や、今の人生を楽しみながら熱斗は中学生活を過ごしていた。
話は戻るが、どうやらロックマンは熱斗に用事があった様だ。
「で、俺の独り言はともかく、どうしたんだよ?」
『どうしたもこうしたもないよ!今日はコジローくんと明日太くんと一緒に、ミシロシティに行く約束だったでしょ!』
「・・・」
「あーーーーーっ!!!忘れてたあああああああ!!何で言ってくれないんだよロックマン!?」
『今言ったし何度も言ったし何より熱斗くん珍しく余裕を持って起きてたのに独り言に夢中だったよね!?』
「こうしちゃいられない!行くぞロックマン!」
『チケット忘れないでね!!』
2階の部屋から飛び出せば、既に朝食も済ませて準備万端の熱斗は必要最低限の荷物を揃え、愛用のインラインスケート、というか自分の足を走らせる。
リビングの母と父に挨拶は忘れない。
「ママ!パパ!コジロー達とミシロシティ行ってくる!」
「行ってらっしゃい!あんまり遅くならないのよ〜」
「お金は出してあげるから、欲しい御土産があったら買っておいで。トーナメントも期待してるぞ熱斗!」
「『行ってきまーす!』」
元気よく飛び出せば、家からそう離れていない駅へと向かう。そこには不機嫌そうな不良っぽい少年と、帽子を被った気の良さそうな少

年が待っていて2人で話していた。
「……おそい！」
「まぁまぁコジローさん、熱斗さんも流石に忘れちゃいないと思うっスよ？」
「忘れてたら大問題だろーが！折角3人分のチケットをやいとに用意してもらえたんだぞ!?」
「そういえばやいとさんも来るって話だったっスよね。」
「デカオ達のチケットは流石に無理だったって。んな幼馴染より俺達を優先してくれなくても……」
「おーーーーーーーーーーい!!!!」
「あ”っ!!」
「熱斗さん！おはようっス！」
　ローランスケートの音と熱斗の大声のする方を向き、不機嫌そうに怒り心頭といった感じの少年は新垣コジロー、熱斗がこの街に越して来てから最初に騒動を起こした人物でもあるが、今となっては才葉シティでのデカオポジション。熱斗の親友にまで昇格している。
　もう一人の少年は大森明日太、こちらも熱斗の才葉シティでの親友、チップショップ「アスタランド」の一人息子であり熱斗が足を運ぶ休みの日や放課後はいつも店の手伝いをしている。
　そんな2人とこの土曜日、最近話題となっているミシロシティでのイベントに行く筈だったのだが…
「集合時間30分過ぎてるぞ熱斗ォ！」
「ご、ごごごめんって！悪かった！この通り！」
　パン！と音がするくらい強く手と手を合わせて頭を下げる。中学生にもなって遅刻なんて、と言いたげなコジローであったが、こういうの見越して早めに集合したんっスと収めるアスタに免じて気を沈めた様で。
「次やったら容赦なく置いてくからな！」
『へっ、相変わらずお前は熱斗に甘いなコジロー？』
「うるせぇ！」
『いつもごめんね、僕も注意してるんだけど…毎回恒例っていうか

……『
『気にすんなよ、コジローのやつ、これはこれで楽しんでるからな！』
そう言うのはコジローのナビ、こちらはオレンジ色のノーマルタイプ（ロックマンの様なデザインは特別なデザインである）のナビであるが、目付きが如何にも不良といったイメージで、喧嘩っ早いオペレーターに似ている様だ。
ただ悪知恵が働き、且つ面倒見の良い性格故コジローとの仲は良好。一度問題は起きたがそれ以降は特に問題無く悪友コンビとしてやって行っている。
「たく……！行くぞ！ミシロシティまで1時間以上掛かるんだからな！」
「分かってるよ！それじゃあ出発だ！」
３人は最後にチケットの確認をしてモノレールの様な電車に乗る。熱斗が入場に必要なものな土を忘れてた誰かに譲って貰う為奔走するのはありそうな事なのでロックマンは一安心した様だ。
因みこの熱斗達の行き先であるミシロシティという場所、熱斗達が才葉シティ…セントラルタウンに越して来た頃に段々と名を各地に轟かせていた大都市らしい。
ミシロシティの掲げるテーマは「リアルとネットワークを通じたアイドルによるエンターテイメント」と言う事だそうで、一見するとネットアイドルやナビのアイドルと思われがちだが、あくまでミシロシティの登用しているアイドルは全てリアルの人間であり、リアルでの活動を広大なネットワークを利用し全世界に配信しているとの事。
ミシロシティ最大の街であるミシロタウンにある３４６プロダクションに所属するアイドル達は日々、人々の笑顔の為奔走していると言う
実はミシロシティはその広大な面積に関わらずネットワーク社会、電脳世界がつい最近まで発展途上だったもので、他の街とは一線を置いていた為今まで日の目を見なかったものの、ミシロシティ自体はアイドルによる盛り上がりはとてつもなく、一部地域からは注目を浴びていた。

今日、他の街と同等のネットワークが完成し引かれた為、掲示板でちょくちょく騒がれるのが関の山だったアイドル達は前面に押し出された。勿論ネットナビやネットワークの遊び場等の人気は健在であるが。それでもこの盛り上がりは一過性かもしれずとも歴史に残る程の物だったのだ。

そんな中、熱斗の小学校での親友の一人、綾小路やいとから一通の招待状が届いた。

「ネットワークシンデレラフェスティバル」……３４６プロダクションのアイドルが一同に介してミニライブや握手会、物販、ネットバトルトーナメントの実況解説、はたまたアイドル達も参加するトーナメント等が開かれるという一大イベントだ。

ただ、このイベントには一般枠と招待枠がある模様で、財閥のお嬢様であるやいとの所に一通、そして財閥自体に四通が届いたという事で、熱斗達も招待される事となった。どうやらやいとの両親は両親で招待を受けたらしく、そのせいで余ったのだとか。

同じ小学校時代の親友であるデカオやメイルは良いのかとメールで尋ねた所「２人は一般で行くらしいから会ったら挨拶しときなさいよ！というか会いなさい！」との事。要するに熱斗やコジロー達が来るのを忘れない様にする為のやいとなりの配慮なのだろう。デカオに関してはメイルがいれば心配無いだろう。

「それにしても……ミシロシティネットバトルトーナメント！これだよな～！」

「熱斗！こないだの中学開催のトーナメントじゃ負けちまったが、今度こそ負けねぇからな！」

「ふ、２人共……アイドルはどうでも良いっスか……？」

「よくない!!」

『『……（はぁ）』』

実はやいとの招待が無くとも熱斗達が一般で行く可能性は充分過ぎる程にあった。理由は単純明快、つい先日、才葉シティのバンパクにアイドルユニット「Ｌｉｎｋｅｒｓ（リンカー）」がやって来たからだ。

「Ｌｉｎｋｅｒ」とは３４６プロダクション内でつい最近(と言ってももう数月は経つか)出来たユニット、５人のアイドルと専用ネットナビで構成されたユニットである。各メンバーの腕っぷしも女の子とは思えない物で、今やアイドル業界のグループ式ネットバトルではトップ争いに参加している程。

その折にネットバトル自体はしなかったのだが、バンパクで彼女達がネットバトルが強いと言う事を知り、熱斗やコジローはすぐに帰って動画検索、その戦いぶりやアイドルの可愛らしさに心惹かれてしまったという訳だ。

……メイルに知られてはどうなるか分からない為ロックマンは気が気で無かったりするのだが。

兎にも角にも、熱斗達は今日は存分に楽しむつもりでいた。目的はＬｉｎｋｅｒの５人との握手や交流、そしてトーナメントへの参加である

「燃えるよなぁコジロー！ボンバーッ!!」

「あったりまえだ!!待ってろよ～○○ちゃん！」

「僕は○○さん推しっスね～」

『へぇ、奇遇だね明日太くん！僕もだよ！』

『コジローは大人の女が好きだからなぁ～(ニヨニヨ)けどありゃぁ大人の女……て言うのか……??』

「う、うるせぇ！お前だってファンだろ?!」

メトロの電車の中で他愛の無いやり取りが繰り広げられる。目的地までは約２時間程。恐らく熱斗達の話題は尽きないだろう。

――この時、そしてイベントまではまだ、熱斗達の心はドキドキワクワクのみで満たされていた……

ネットワークシンデレラフェスティバル！

「つ　い　た　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ　あ!!!」

「うるせぇ!!!」

バギィ!!と悲痛な打撃音が駅前に響く。中学生に上がったコジローの腕力は普通に小学６年生の時よりも上がっている。熱斗は軽く吹き飛ばされるがすぐにその場に戻ってきて埃を払い。

「何すんだよー、折角ミシロシティに来た喜びを噛み締めてたのにさー」

「何もどうもあるか！流石に迷惑過ぎるんだよ！ほら見ろ周りを！」

ミシロシティのイベント目当てでやって来た者が殆どだろう、駅からずっと続く列にいる人々は何人かが熱斗達に訝しげな視線を向けていて

「……いや、アレはコジローが熱斗さんをぶん殴ったからっスよ、多分」

「……まじ？」

『多分マジ』

一般人からすれば大都会への浮かれで暴れている中坊たちに歯科見えないだろう。それはゴメンだと、熱斗達はそそくさとその場を後にする。

「んで、やいととの待ち合わせ場所ってどこだっけ、ロックマン？」

『えーと……確か招待枠の列の最後尾で待っててあげるから、早く来なさい、って書いてあったよ！』

「なるほど、サンキュ！」

ロックマンにメールの内容を確認してもらういつものやり取りを終えれば、得意のインラインスケートを走らせる。勿論コジロー達も遅れない様に着いてくるのだが……流石はアイドルの普及した大都市、中学生の足では幾ら走っても会場までの道程が遠く、しばらく走ってからは熱斗も含めて皆ゆったりと歩みを進めていた。

「・・・・めっちゃ遠いな!!」

「思ったより遠かった……」
「あっ！でも会場が見えてきたっスよ！あれじゃないっスか!?」
　明日太が指差す方向に見えるのは超巨大なビルやドームが複数立ち並ぶアミューズメント施設。このイベント、引いてはこの先何度もあるであろうイベントの為に作り上げた３４６プロダクションの施設だそうだ
　それを見れば当然熱斗達のテンションは爆上げ、らしくないがロックマンも高揚している。
「「す、すげぇ～～～!!」」
『あ、あれは……凄いね……イベントのサイトで見たのと全然イメージが違うや…』
『……あれの１つが物販の為の場所なんだろ？とんでもないよな……』
　金の無駄遣いではないかと問われたらＹＥＳとしか返せないだろうが、絶対にこのイベント、最悪次のイベント辺りで赤字になる程の実力があるからこそ、こんな大掛かりな施設を用意したのだろう。
　そんな社会的な事情を話すのはナビのみであり、熱斗達は再び駆け出す。一般枠として並んでいる人々に申し訳無くも思うがこれもお嬢様を親友に持ったが故の勝利である。
　というか今の最後尾は果たして会場に入れるのかと少々心配になりながらも熱斗達は会場へと向かった。
　……結局、駅から２０分程走りようやく会場へ。巨大なゲートに「Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｔｈｅ　３４６　Ｎｅｔｗｏｒｋ　Ｃｉｎｄｅｒｅｌｌａ　Ｆｅｓｔｉｖａｌ!!」と書かれていて、可愛らしいナビや緑のネコ等も描かれている。
「「お　お　お　お　お　お　お　お　お　お　お　お　お　お　お　お!!!」」
　３人の少年の雄叫びは恐らく会場にまで届いたのではなかろうか。その声を聞き付けてすぐに、背丈の小さな金髪の、ザ・お嬢様と言わんばかりの風格を纏った少女が額を光らせながら飛び出して来る。
「うるっさあああああああい!!」

「うおおあおっ!?や、やいと!?」
３人共、飛び出してきたやいとに萎縮する。身長に能わず剣幕が凄いのがやいとの特権である。
「やいと!?じゃない！アンタ達うるさいったらありゃしないわねホント……まぁ大森くんは意外だったけど。光くんに新垣くんはもう少し落ち着いたらどうなの？」
「面目ねえ……」
「コジローのせいで怒られた…」
『熱斗くんも悪いでしょ！』
『お久しぶり……ではありませんが、おはようございます。ロックマン』
『あっ、グライド！えぇと、こうしてＰＥＴから話すのは、久しぶりかな』
熱斗とやいとのＰＥＴの中で会話を交わすロックマンと、やいとのパートナーである特製ナビ、グライド。戦闘能力自体はそこまで及ばないが、数あるナビの中でもトップクラスの良識と礼儀正しさを持ち合わせている。
「あっ、そうだ！サンキューなやいと！招待状くれてさ！」
「余ってたからね、そんならまず光くんにあげるべきでしょ？ホントはメイルちゃんとデカオにも渡したかったんだけど、新垣くんと大森くんに自慢する光くんの顔、想像しただけで憎たらしかったから」
ギグ、とあからさまに動揺する熱斗。確かに一人だけもらってたら学校で散々自慢し倒してた自信さえある。
「……それだけはほんとに勘弁だな…ありがとよやいと！」
「ありがとうございますっス！やいとさん！」
「どういたしまして。それじゃ早速中に行きましょうか。正直招待枠が色んな所がキャンセルしてるせいで招待状さえ持ってればすぐ入れるみたいだから」
挨拶もそこそこに、４人は係員に招待状を見せてゲートを潜った。暗く続いて行くゲート、何の効果かは分からないが先は真っ白な光で、その光に飛び込んだ瞬間、熱斗達の前には正に夢の様な光景が広

がっていた。

《皆ノッてるかーーー！今日は一人別のトコ行っちゃっていないけど、ポジティブパッションは２人でもＬＩＶＥはするよーーーー!!》

「「「「イエーーーーイ!!!パッショーーーーン!!!」」」」

《ＯＫ!!次のナンバー！頼んだよ奈々ちゃん！》

《みく達の次は奈々ちゃんにゃ！皆名前を呼んであげるにゃー！》

「「「だりいいいいいいいいいい!!!」」」

「「「みくにゃーーーーーん!!!」」」

「「「奈々ちゃああああああああん!!!」」」

《はーい！みっなさーん！ウサミン星からやって来た、歌って踊れる声優アイドル！ウサミンこと！安倍奈々でーっす！ミミミン！ミミミン！ウーサミン！》

「「「「ミミミン！ミミミン！ウーサミン!!」」」」

《っしゃぁー!!次の曲行くぜぇ!!炎陣！上げて行くぞおおおおおおお!!》

《生存者全員!!作戦続行に問題は無いでありますなーーーー!?》

「「「「応おおおおおおおおお!!!!」」」」

とまぁ、これはあくまで一部のドームの中で行われているＬＩＶＥの話、熱気や歓声自体は多少伝わって来る物もあるだろうが防音はしっかりされている。

熱斗達が目にしているのはまるで遊園地の様な、様々な出店や装

飾、物の配布や販売、またそこら中を歩いている休憩中のアイドル達の様子等も目に映り、皆目を輝かせる。
　何より人々の盛り上がりが熱斗達にも影響した。今すぐ駆け出したい衝動を抑えながら、熱斗達は足踏みをひながらやいとの方を向く
「「どこから行く!?!?」」
「どこから行くっスか？やいとさん！」
「んー？あたしはメイルちゃん達の様子見てくるから、アンタ達は先に回ってなさいな、招待枠再入場出来るし」
　至れり尽くせり招待枠、やいとお嬢様万歳と土下座までしそうな勢いで頭を下げればやいとはゲートへと戻って行った。
　どこから回るか、なんて事は考えない。ただ本能の赴くままにと言わんばかりに３人は駆け出した。
　まず足を運んだのは腹ごしらえの為の出店。ポイ捨ては絶対厳禁、ゴミ箱は設置してあるからそこに捨ててという言いつけはしっかりと守り、某ポジティブパッションのメンバーの一人の好物であるフライドチキンやどこぞのドーナツ大好き少女オススメの店のドーナツ等を頬張り、その後もＰＥＴにインストールした会場のマップデータを見ながら色々な所を回っていた。
「おぉ～～～！すげぇ！ここがＬＩＶＥ会場かぁ～！」
「え～っと、次のここのＬＩＶＥは……あっ！ラブライカとＴＰ!??見てって良いっスか熱斗さん!!」
「Ｔｒｉａｄ　Ｐｒｉｍｕｓ!!見てこうぜ!!」
「なぁ俺あっちのドームが……」
「我慢するか一人で行けぃ！」
「酷くねぇ!?」
　ラブライカ、Ｔｒｉａｄ　Ｐｒｉｍｕｓ、どちらもミシロシティから売り出している有名アイドルユニットである。明日太は特にラブライカのファンであり、この為に来たと言っても過言ではないレベルだそうだ。
　熱斗もＴｒｉａｄ　Ｐｒｉｍｕｓの魂に響く様な、妥協を許さない志を持った歌を気に入っておりこれを見ない手は無いと、すぐに空い

ている席に着く。どうやらコジローは別のドームのＬＩＶＥが見たかった様だがこれはこれで良いのだろう。

……数分後、ラブライカのメンバー……シンデレラプロジェクトの「新田美波」と「アナスタシア」がステージに上がる。衣装は勿論Ｍｅｍｏｒｉｅｓの物

《皆さん！お集まりいただいてありがとうございます！私達、ラブライカの曲を聞きに来ていただけて本当に嬉しいです！》

《Благодарю вас、ありがとう、ございます。ワタシ達も全力で、歌いマス！》

「おああああああああ!!!ラブライカ最高っスーーーーーーー!!!」

「す、すっげぇ……！生の新田美波だ……!?!?」

「おおおおおお………」

初めての生のＬＩＶＥ、興奮しない訳が無い。ラブライカのＭｅｍｏｒｉｅｓに続き、Ｔｒｉａｄ　ＰｒｉｍｕｓのＴｒａｎｃｉｎｇ　Ｐｕｌｓｅまで聞けば一旦ドームの外に出るのだが……

「▪%`@は„?（＊$^の!!!」

「}―.;%„ .;„ €?℃▪%℃&$!!!」

「ほ&38„ :@?（ん＊:1:―）」

最早感想なのか何なのか分からない３人の感動を分かち合う声。他の人々の熱狂もあり迷惑にこそなっていないものの、これは熱斗達にとって初めての経験。こうなるのも無理はない事であった。

何度かＬＩＶＥを見て２時間程経過し、既に午後の１３時を回った頃………昼食をどうするか、という話題でようやく平静を取り戻した３人………

「………ヤバいな、これ」

「あぁ………俺、今までドルオタちょっとナメてたわ…」

「僕もっス……こんなんグッズ買い漁るのもＣＤ１００枚買い占めるのも無理ないっス…」

『………』

『……ロックマン、苦労するな…』

『無駄遣いだけはさせない様に善処するけど………でもまぁ、熱斗く

ん達が楽しめてるのは良い事だよ、うん。』
『無理すんなよ…』
　存在を忘れられかけているロックマンとコジローのナビ、ＰＥＴの中でのやり取りは虚しいが、確かに２人もこのＬＩＶＥやイベントの素晴らしさは痛感していた。これだけのイベントなら建設費や企画に掛かった費用は全て赤字となって帰って来るだろう。
　どうしてこれだけの企画をする力があったのに、と言うよりも、ここまで漕ぎ着けるだけの力があったのに、電脳世界があまり普及していなかったというだけであまり知られていなかったのかがロックマンは不思議でならなかった。
　熱斗達はと言えば、昼食をどうするかで頭がいっぱいだった筈なのに、ある物を見てその考えは一気に吹き飛んでいた。
「う　お　お　お　お　お　お　お　!?あ、あれって!?」
「ネットバトルスペースか!!」
「ね、熱斗さん！コジロー!!」
　ドームの中にある何十台とあるネットバトルスペース、老若男女問わずナビを用いたバトルが行われていたが、そのドームの上の方から見下ろす形で見ていた熱斗達はある人物に目が行く。
「「あ、あれってええええええ!?!?!」」
　熱斗達が目を輝かせて熱い視線を飛ばす先にいるのは、そう、熱斗やコジローが大ファンであるアイドルユニット「Ｌｉｎｋｅｒ」のメンバーの内の２人であった。どうやら一般人と対戦中の様だ、ノーマルタイプの少々悪っぽい外観をしたナビに対して、道着の様なデザインに素手で戦う漢らしいナビと、如何ともし難い雰囲気を放っているフリフリのアーマーを纏った女の子ナビが戦っていて……オペレーターの方も、道着とステージ衣装の様で
「行きますっ!!カラテマン!!お願いしますっ!!」
『押忍!!こいつで！トドメだあああああああああっ!!!』
『ぐぉわあああああああああああああっ!!!??』
　カラテマン、そう呼ばれたナビは腕を思い切り振り下ろして相手の

ナビの脳天を叩き割るチョップをかまし、すかさず正拳突きを叩き込む。相手のナビは吹き飛んで行き、ステージの障害物を幾つか突き抜けてから地面を転がって行き……ブヴゥゥン…という音と共に、オペレーターのＰＥＴへと戻って行く。オペレーターは心底悔しそうな顔をしているが、カラテマンの方のオペレーターは大きく深呼吸をし、深々と頭を下げる。

―一方

『☆そろそろ飽きてきたしぃ～ちゃちゃっと決めちゃおうよぉはぁとぉ☆』

「おっけー！って訳でごめんねチャレンジャーくん！はぁとは負けられないし、ファンの皆も待ってるから、そろそろ決着だよー☆バトルチップ！トレインアロー！」

インストールされたバトルチップの効果により、ナビの腕に弓の様なパーツが。ナビの機動力を活かし距離を取れば、その離れた距離の分だけ水の矢が発射される。

『ラブ〇ローシューーット☆』

その台詞はマズくないかと察するファンもいた様だが７割は対戦映像に夢中で気が付かない、８本程の矢が真っ直ぐに敵のナビへと向かって行き、これまでの戦いで消耗した敵は躱せずに全弾命中、ただまだ倒れてはいない。

「た、立て！立つんだ！ジョー！」

『う、うおおおおおおっ!!』

『しつこい男で許されるのはぁ～？』

「はぁとをもらってくれるイケメンさんだけぇ！☆」

補く華奢なナビの腰から伸びた装飾。ただの飾りかと思わせる外観だが、相手に向かって伸びればその片腕に巻き付いて、次の瞬間…いつの間にスロットインしたのか、超巨大な砲塔、センシャホウの轟音が鳴り響き―

『どわあああああああああああ!!!!!』

「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ!!!!」

挑戦者側のナビは２体共ＫＯ。対してアイドル側はほぼ無傷。多

少ナビの性能が目立ってはいるが、それでもオペレート技術も大した物だと、熱斗達は感動を抱いた。
　パチパチと拍手や歓声が湧く中、２人のアイドルはナビをＰＥＴに戻してからハイタッチを交わす
「ナイスだったよ～、有香ちゃん♪」
「こちらこそです、佐藤さん！ぁっ、次の方、どうぞ！」
「って、あれ～？いないの？もしかしてはぁと達やり過ぎちゃった??」
　かなり離れた所から見ているのに、熱斗達はそのやり取りをとんでもない地獄耳で聞き取っていて
「「・・・」」
「中野有香だあああああああああ!!!」
「しゅがはだあああああああああ!!!」
「佐藤心さんっス～～～～～～～!!!」
　すぐさま駆け出して階段へと向かう。熱斗に至ってはローラーを階段の手すりに合わせて滑り降りる始末。見られたら１００％危険行為として連行されるだろう。
「はい！はい！俺やります!!」
「熱斗、タッグマッチだぞ！俺もやる！」
　恐ろしい数の見物人や挑戦者達を掻き分けて前に出て来る熱斗とコジロー。明日太は少々手間取っている様だ。
「貴方達ですね！挑戦、受けて立ちます！」
「お～☆元気の良い子供達っ！はぁとと有香ちゃんに泣かされても知らないぞ☆」
　熱斗達の挑戦を勿論アイドルは受ける。また、観客のこの熱斗達の挑戦に対する反応は大きく分けて３つあった。
「バカなガキだな……勝てると思ってるのか？」という、今までの結果を見てきた故、熱斗達中学生では敵いっこないと思う者
「あれって光熱斗じゃないか!?」と、そう、熱斗は元々世界規模のトーナメントでの優勝経験を持つ超一流ネットバトラー、普段から大規模の大会に出場している訳では無いので知らない人も多いかもしれないが。

それでも何割かは熱斗の登場に驚いている。因みに相手の２人は気付いていない、というか知らなそうだ。

そして、「早くトーナメント始まらないかな」と思っている人々、実はこの後ネットバトルトーナメントが開かれる為その為にこのバトルスペースに来ている者もいるのだが、まだ小一時間ある為暇潰しに見ていると言った感じか。

熱斗とコジローはＰＥＴを取り出して構える。

すると相手のアイドル……道着を着込んだ空手少女、中野有香と、フリフリのアイドル衣装に身を包んだザ・アイドルといった風貌の佐藤心も自身のＰＥＴを構えて……

「「プラグイン!!」」

「プラグ・イン！ロックマンＥＸＥ！トランスミッション！」

バトルフィールドに４体のナビが降り立ち、再び歓声に包まれた。